



## 『幼児の教育』誌

### 編集時代に支えられる今

向山 陽子

創刊一〇〇巻、おめでとございます。

歴代の編集委員、編集部の方々の顔ぶれに圧倒されると同時に、第八十七巻第四号、第八十八巻第三号まで、都合わずか一年しか編集できなかった私まで、この企画に書かせて頂ける幸せを感じたいします。

昭和六十二年秋、娘が幼稚園に入園して半年、地域の子育て仲間との濃いつきあいからちょっと距離をおき、私も幼稚園通いを楽しみ始めた頃、現お茶の水女子大学学長本田和子先生から『幼児の教育』誌編集に携ってみたいかというお話を頂きました。

身に余る光榮と、不安に押し潰されそうになりながらも、とびつくようにお引き受けしたのが昨日のように思い出されます。

前編集者の方からノウハウを教わり、フレール館のI氏から編集のイロハを教わりながらの危っかしいスタートでした。自宅で編集作業をさせて頂き、I氏にはどれだけ御迷惑をおかけしたことでしょう。穏やかなお人柄に支えられて、燃えることができました。

娘を出産し、幼稚園教諭を辞め、望んだ我が子との生活は生きがいにあふれていました。子育て仲間、同窓の先輩・友人にも恵まれていました。でも、やっぱり、でも、やっぱり、欲張りだけれど、直接「社会」とつながりたい思いが常に地底のマグマのように真っ赤に燃えていたのだと思います。

I氏がほとんどの作業を手直し下さってできた、第一冊目、第八十七巻第四号。この編集後記は一気に書き上がったのを覚えています。子育て中の閉塞状態の大人としての思いを「社会」に向かって吐露したのでしよう。

**編集後記（第八十七巻第四号）より抜粋**

私と「幼児の教育」誌との出会いは、十七年前にさかのぼります。

当時、お茶の水女子大学附属幼稚園内に児童学科津守研究室があり、その中に、当誌編集部がありました。楽しみに企画について話していらした、当時の編集者の方を思い



出します。

幼稚園教諭時代、「幼児の教育」誌は、日々の保育の指針となってくれる力強い存在でした。

我子を持ち、地域にもどったこの四年は、年に一度ずつ母親としての歴史を書かせていただき、流れていく毎日を意識的に暮らす励みになっておりました。

このたび、編集させていただくことになり、復刻版を手にしてみました。

倉橋惣三先生をはじめ、保育界の重鎮の方々の文章にふれ、この、歴史ある雑誌を編集する責任と喜びを、感じていきます。

子どもの数が少なくなっていることの各方面への影響は？ あちらこちらに、子どものための施設や、イベントは豊富だが、はたして家庭の、地域の、日々の子育て能力は？ 世の中、きれいになりすぎて、子どもに必要なものまで、不潔視していないか？ 等の問題に取り組み、各方面の方々、特に毎日、子ども達と過ごしていらっしやる方々に寄稿して頂きたいと考えております。(後略)

\*

現在、駒場幼稚園園長という職を得、当時の私とそっくりな、子育て中の若い女性の近



くで毎日を過ごしています。改めて、この編集後記の文章を読むと、あの頃の自分を、今の駒場幼稚園の若いママ達を、抱きしめたくらい愛おしくなります。

今から十三年前——昭和天皇が崩御され、ベルリンの壁が崩れる一年前、先進国といわれる国の人々がテレビ中継で見たあの湾岸戦争の三年前、日本がバブルで浮かれていた数年前——の私がここにいます。

今回、この文章を書く機会を得て、久し振りに十三年前の私に出会えました。

『この、歴史ある雑誌を編集する責任と喜びを、感じています』

夫のオランダ赴任に伴って日本を離れるため、たった一年しか参画できなくなるなど、この時の私は夢にも思っていないません。

『子どもの数が少なくなっていることの各方面への影響は？（略）はたして家庭の、地域の、日々の子育て能力は？世の中、きれいになりすぎて、子どもに必要なものまで不潔視していないか？』

今の私は、十三年前の私から改めて、メッセージを受け取りました。

本誌内容を改めて読み返してみると、『幼児の教育』誌が、常に時代にアンテナを張り、目の前の子どもと、子どもの生活に沿って、変わるべきものと、変わらざるべきものとを記し、伝え続けてきた凄さに圧倒されます。



それは、まぎれもなく、時代にアンテナを張り、そこに生きる目の前の子どもと子どもの生活に沿った一人の人間が書いた文章が集まった凄さであるという、当たり前の実感が、私に勇気を与えてくれます。

たった一年間の編集ではありませんでしたが、連載をお願いした、故清水光子先生、鮑田典子先生には、大きな影響を受けました。

編集会議を復活したこと、表紙の装丁を変えたこと、扉題字を堀合文子先生に書いて頂いたこと、扉カットをお茶の水女子大学附属幼稚園園児の絵にしたこと……。手描き鯉のぼりの取材に行ったこと、現場の先生方への取材を文章にするのが難しかったこと……。割りつけの仕方、罫線を選ぶセンス、カットの置き方……。読ませたいなら、読み易く!! 空白の使い方が読み易さを決める! 等々。わずか一年の『幼児の教育』誌編集の体験ではありませんが、人との出会いは勿論、編集のハウトゥまでが、今の私の一部となり影響を受けていることに改めて気付かされます。今の仕事にどれだけプラスになっているか測り知れません。

こんな事もありました。編集作業は、五歳の娘の眠った後にしかできません。当時は、ワープロ原稿が年に二、三回入るかどうかの頃で、定規と糊とはさみと原稿用紙を部屋



いっぱいに広げて作業していました。深夜にまで及び、仕事で遅くなった夫が帰ってきて、その様子を見て言ったのです。「誰も働いてくれと頼んだ覚えはない!」。それに対して「誰のためにやっているのでもない、私は私のためにこの仕事をしているの!」。あの日以降、私は夫の大きな声を聞いたことはありません。そして、今の仕事を誰よりも理解し、私を支えてくれます。

五年前、駒場幼稚園に、現保育学会会長津守真先生が来て下さった時、「幼稚園」の枠からはみ出ちゃいなさい」と励まして下さった言葉を支えに、今、幼児達と生活している毎日が、大きな流れの中に位置づいてきました。私は大きな力で生かして頂いて今があると思えてきました。

平成元年四月六日、桜吹雪の中、日本の小学校では入学式が行われている時、私と六歳になった娘――その式に参加するべき母子――は、夫の待つアムステルダムに向けて、日本を離れようとしていました。私のバッグの中には、精算できていない、領収書がいっぱい入っていました。「オランダに着いたら時間はたくさんある。ゆっくり報告書を書いてフレール館に請求しよう」と思っていたのに、未だにファイルにはさんだまま「オランダ」と書かれた段ボールの中に在ります。

あの頃の熱い思いと共に……。

(駒場幼稚園)